

三酔人地方議会問答

京都大学公共政策大学院五期生(三田市議会議員)

笠谷 圭司

祇園先生は生まれつきお酒が大好き。特に焼酎のお湯割りにには目が無い。また、政治を論ずることが大好きである。酒を飲むと、精神がにわかになかぶり、思想がしきりに沸き起こり、身は小部屋の中におりながら、眼は全世界を見通し、一瞬間に千年前にさかのぼり、千年後にまたがり、世界の進路を示し、社会の方針を教え、思うには、「自分こそ人類の社会生活の指南車である。世間の政治的近視眼者どもが、やみくもに羅針盤を握って船を操縦し、暗礁に突き当たったり、浅瀬に乗り上げたり、わが身にも他人にも災いを招くのは、何ともお気の毒の至りである」。

近頃、冬の寒さも極まり、窓の外は烈火のごとく吹雪いている。気分も沈鬱し、炬燵で寝そべっては何をやる気も起きない。そんなある日、日課の独酌をするうちはやいまい心持ち、宇宙を

歩みゆくような境地に達した。ちやうどその時、二人のお客が『百年の孤独』という高級焼酎を携えてやってきた。先生は彼らに一度も会ったことはなく、姓名

も知らないが、焼酎を見ただけでのどが鳴る。

一人のいでたちは、上はジャンパー、下はジヤージとみな安物で、おまけに青色の野球帽を被っている。しかし、そんな見た目と裏腹に、目元涼しく鼻筋通り、身体はしなやかで凛としたたたずまい。この人はきつと思想という部屋で生活し、道義という空気を呼吸し、論理の直線のままに前進して、現実のうねうねコースをとることをいさぎよしとせぬ哲学者にちがいない。もう一人は、長身でひげをたくわえ、小洒落た身なり。余裕しやくしやくのしたり顔で辺りを睥睨^{へいげい}。気宇壮大でこの世の政治的難問を我ひとりの力で解決してやらんといった風情である。

席につき、挨拶も済み、早速孤独の焼酎が注がれ、主人とお客が盃のやりとりをするうちに、次第にいい調子になってきた。先生は、一人の



客を庶民革命君と呼び、もう一人を議会紳士君と呼んで、姓名を尋ねようとしてもしない。お客の方でも怒らず、ただ笑っている。そのうちに庶民革命の客がふと言い出すには、

「先生のご高名はかねがねうかがっております。先生の学問は東洋と西洋を兼ね、識見は古今を貫くということですが、一度先生のご批判をうけたまわってみたいものです。」

嗚呼、地方議会！これほど馬鹿げた猿芝居がありませんか？よくもまあ、税金を払っている庶民の地獄の苦しみを知らずして、特権階級の議員は税金でこのうと飯を食っていることよ！目玉が飛び出すほどの高額な報酬をもらえ

れば、こんな極楽な商売、誰も辞めんわな。議員がすっかり家業化、貴族化しているよ。

そもそも国民の苦しい生活はすべて政治家の罪である。政治が良くなれば、この世のすべての難問は解決し、地上に樂園が現れる。民主主義は、国民と優秀で全能な首長ひとりいればそれで十分なのです。

地方議員は、地域や組織の代表で完全に名誉職。あるいは民間で使い物にならなかったような輩ばかりだ。専門議員も問題だが、兼業議員も問題。平均年齢も高すぎる。議場は出来レースで水面下で談合。こんな伏魔殿は詰まる所、不要のひとこと。まずは議員の定数を半減せよ！報酬を半減せよ！仕事をしない議員は即刻辞めなさい！国民はだれも困りませんから。

政治とは税金を一元でも安くすること、すなわち減税。これに尽きます。行政は無競争の独占企業であるから無駄の海。増税は行政の肥大化あるのみ。

地方議員は結局、中間業者である。インターネットの登場で消費者と問屋が直接取引できるようになってマージンが消失したのと同様、政治も首長と国民が直結できる仕組みがコストも省けて合理的である。

若者からお年寄りまで国民が自らの手によって理想の自治を作り上げていく。政治を職業化

せず、任期を明確に定めることではじめてそれが可能となる。地方政府は自治区を細かく分割し、それぞれ選挙を通じてボランティアのミニ議会を置き、それぞれに課税権など権限を委譲して連邦制にまで育てていく。地域の政治はミニ議会が行う。地方議員は、当面半減させた上でひとまず全体的な仕事にでも専念させるが、将来的に議会は廃止する。国会議員も仕事の割には数が多すぎるので、首長が国会議員を兼職できるようにすればコストも下がって、その分浮いた税金を国民のみなさまにお返しできるからなお良いということす。

祇園先生は一言も言わないで黙って聞いていたが、ここで自分も一杯飲み、ついでに二人の客にも酒を注いでいうには、「革命君のご主張はとっくりうけたまわった。紳士君、どうか君も立派な説を聞かせてよくを啓発してください」。紳士の客、「世論が万能ならば、政治家は必要ないだろう。政治はマスコミの世論調査とアンケートだけで十分だ。しかし、現実には世論・民意に時として瑕疵・誤謬があるから、地方議員がその矛盾を埋め、正常化させているのだ。そもそも一般国民に政治などできるわけがない！政治とは、イエスカノーかの単純な二者択一ではなく、高度で複雑な連立方程式である。決断

の連続で人の恨みも買う。選挙で選ばれた公人ゆえ、二四時間三六五日、誤解や噂、偏見の中、プライバシーもなく、日夜自身の政策に磨きをかけるため、陰に陽に研鑽しなければならぬ過酷な職業である。

議場は出来レースと革命君はおっしゃるが、水面下の交渉は絶対に必要だ。己の思いのたけを存分にぶちまけたところで政治はちつとも動かない。むしろ、嫌われ後退する。行政と議員は時に批判し、時に賞賛し、おだて、なだめ、あらゆる感情の機微の中で持ちつ持たれつ、うまくやっていくことが求められる。これこそ地方議員の本分である。その営みの中で、一歩ずつ前進できればそれで良いでないか。

議員は貴族といわれるがとんでもない！地方議員年金はすでに破綻し、月々の掛け金は年々増額を重ね、高止まりし、高額な国民健康保険税に日々の政治活動費、次の選挙のための積立金等考えると、とても生活していけないのが現状である。おまけに福利厚生も退職金もない！ローンも組めず、蓄財など夢のまた夢だ。たしかに政令指定都市は多少優遇されているかもしれないが、その他の地方議員の歳費の実質手取りが一〇万円台などざらにある。現実には悲惨を通り越して残酷ですらある。それでも国民のため力の限りがんばっている地方議員がいる事実

には一切目が向けられないがね……。

『定数削減！報酬削減！』。結構、結構！それが真の二元代表制への道だと世間は考えているらしいが、見当違いも甚だしい！詰まる所、地方議員憎しの感情論である。われわれは『選挙に落ちればただの人』だ。この冷酷な政治の世界になぜいるか？それは地方議員に公的貢献の良心があるからだ。マスコミの罪と国民の無知の中、議員の高度な仕事が有権者に正しく伝わっていない。今日のように議員の社会的地位が国民の手によっておとしめられればおとしめられるほど、議員のなりてがいなくなり、ひいては日本の国力の減退につながり、国民生活にはねつかえるということがどうしてわからぬものか……。嗚呼、自分で自分の首を絞める変な世の中になってしまったことよ！。

言いつ終わるや、紳士の客は焼酎を飲み干した。祇園先生、「革命君の説は、純粹で正しく、紳士君の説は、合法で卓抜だ。革命君の説は、劇薬だ。胃は避け、腸は破れる。紳士君の説は、強い酒だ。眼がまい、頭がくらくらする。私はもう老人です。両君の説は、私の衰えた頭脳では、到底理解し消化することはできない。どうか両君、それぞれ努力して、時期が来たら実際に試みていただきたい。私は見物させてもらい

ます。

革命君は、もっぱら議会不要論を主張されるが、どうもまだ政治の本質というものをよくつかんでいない点があるように思われます。政治の本質とは何か。市民の意向に従い、市民の知的水準にちょうど見合いつつ、平穏な楽しみを維持させ、福祉の利益を得させることです。今日、あなたの脳髓にだけひとつぶの革命の種子が発芽したからとて、それによって早速豊かな収穫を得ようなどというのは、心得違いではありませんか。

紳士君は、独自の知恵で構築された地方議会の論理に安住してきたように思われます。たしかに今でも自分の支持者だけに目を向けていれば次の選挙で当選するかもしれません。けれども、情報化が進展する今日、自分の支持者でない有権者にも議会の説明責任を果たす努力をしていかなければ、社会の不満はいつそう募るばかりです。首長は独任制で政策決定にスピードがあります、その分もろい。議会は合議制で政策がもまれて決定の練度が増しますが、その分時間がかかります。おたがいメリット、デメリットがあるのです。ただ、責任という概念では首長の方が国民にとって、わかりやすい。議会は多数数ゆえ責任も分散、希薄化してしまうから国民にとって、わかりづらい。議会の責任を負

うべき議長職に議会招集権、人事権など対等の権限を持たせる努力を怠り、地方自治法では本来任期四年のところを独自の知恵で一年交代の持ち回りにしてしまったのが、議会が形骸化したと国民から批判される大きな要因のひとつであるではありませんか。

両君がそれぞれ積極論、消極論をとって譲らず、一方はまだ生まれていない新思想を目指して、やたらに前進しようとなさるし、一方はとつくにすんでしまった古い芝居を振り返り、やたらに後退しようとなさる。主義は氷と炭のように相容れないように見えるが、私の見るところでは、その病源は実はひとつなのです。ひとつとは、何か。思いすごしということです。

多くの場合、政治家同士が恨みを結ぶのは、実情からではなくてデマから生ずるものです。実情を見破りさえすれば、少しも疑う必要がないのに、デマで憶測すると、実にただごとならぬように思えてくる。だから、政治家と政治家がたがいに疑うのは、各人のノイローゼです。青メガネをかけてモノを見れば、見るものすべてが青色でないものはない。政治家のメガネが無色透明でないことを、私はいつも憐れに思っています。こういうわけで、政治家と政治家が戦争を始めるのは、どちらも戦争が好きだからではなくて、実は戦争を恐れているためにそう



なるのです。こちらが相手を恐れ、あわてて軍備を整える。すると相手もまたこちらを恐れてあわてて軍備を整える。双方のノイローゼは月日とともに激しくなり、そこへまた新聞、テレビというものであつて、各々の実情とデマとを無差別にならべて報道する。はなはだしい場合には、自分自身ノイローゼ的な文章を書き、言い放ち、何か異常な色をつけて世間に広めてしまう。そうになると、おたがいに恐れあつてい

戦争を恐れるこの二者の気持ちは急激に頂点に達し、おのずと開戦になってしまうのです。

私の結論は、やはりただ、すべての国民の幸福、安寧を増すために、首長と議会が切磋琢磨する。それだけのことです。くわしい運用は、実際に自治体の現場で新たなモデルを試行錯誤してゆけば、それでよろしい。あるいは、諸外国の地方議会制度を調べて、日本に採用すべきところは採用するのの一法でしょう。こういうことは一時の議論で言い尽くせるものではありません。『首長は議会を思い、議会は首長を思う』。これは馴れ合いではなく、より良い政策実現のため両者ともできる限りの努力を怠らないといったようなことです。

二人の客は、この言葉を聞くと笑って、「私どもは、かねてから先生のご主張が奇抜だと聞いておりました。ところが、今おっしゃったようですと、少しも奇抜なところはな。今日では、誰でもそれくらいのことば知っています」。

祇園先生が居ずまいを正して言うには、「ふだん雑談のときの話題なら、奇抜さを争い、風変わりなことを競って、その場限りの笑い草とするのももちろん結構だが、いやしくも国家百年の大計を論ずるような場合には、奇抜さを看板に

し、新しさを売り物にして痛快がるというようなことが、どうしてできませんか。ただ、私は頑固で投げやりで、時勢に通じていないから、話すことがとかく適切を欠き、恐らくお二人のご期待に添い得なかったことと思うのです」。

そこで三人はまた、たがいに盃を交換し、焼酎はとつくになくなったので、ビールを一、二本取り寄せて、各々のどを潤し、さらにしばらくうちとけてしゃべっていると、突然、隣の鶏が時をつくった。二人の客は驚いて、

「それでは、失礼いたします」。

祇園先生は笑って、「あなた方は、まだお気づきでないのか。あなた方がおいで下さってから、鶏はもう二度時を告げたのですよ。あなた方が家に帰ってみれば二、三年経っていることに気がつくでしょう。これが私の家の暦なのです」。

二人のお客も吹き出し、大笑いして、引き上げていった。その後、三年ばかりの時を経て、拙稿が完成したのである。

二人のお客は、あれつきりやって来ない。報道によると、庶民革命の客は議会解散を問う署名活動を開始し、議会紳士は首長不信任の各会派への根回しを始めた、という。そして祇園先生はただ、あいも変わらず、酒ばかり飲んで